

- 36 『陶説』 説古四八 「格古要論・・・宋文丞相過此。窯變為為、遂不燒」。
- 35 『陶説』 説古四一 「清秘藏。論窯器、必曰柴汝官哥定。柴不可得矣。余向見殘器一片、製為絲環者」。
- 34 『鄭若曾』『日本圖纂』（一五六一年）・『籌海圖編』（一五六二年）・『茅元儀』『武備志』（一六二一年）などの「倭好」に「碗碟以菊花稜為尙。碗亦以葵花稜為尙。制若非  
軀雖官窯不喜也」との記述が見える。
- 33 『御窯は清朝官窯製品のうち特に質の高いものを指す。
- 32 『金海、熊川、紅葉、早船、渡唐屋』斗々屋、御本、判使＝半使はいざれも高麗茶碗の種類名称。
- 31 『仏郎嵌』のこと。明清代に制作された七宝技法の製品。
- 30 『底本及び大宅翻刻では不明二字とされているが、東博所蔵瑠璃釉皿から「恢古」を採用した。
- 29 『黒牟田焼』のこと。
- 28 『鍋島直茂』のこと。
- 27 『鍋島直茂』を制作者の名と考え、伊勢松坂の陶工（桂川中良『桂林漫錄』寛政二年）、伊勢津の人（稻垣默斎『茶道筆蹟』文化三年）、伊勢飯高郡大口村の五郎大夫次男（金森得水『本朝陶器攷証』安政四年）、伊勢の陶工伊藤五郎大夫（石割松太郎『祥瑞の研究』）など日本人陶工とする説が近世から近代にかけて唱えられた。さらに『本朝陶器攷証』などでは有田焼に関して「山田五郎大夫に始る。・・・五郎大夫帰朝の後、火候を驗するに、伊万里の近所なる有田皿山の地、火候烈にして染付に合を以て、同所にて焼ものを始むと云」と記されるなど、吳祥瑞をその創始者とする言説があつた。
- 36 『肥前名物題注』（千住西亭文書、個人蔵）のこと。肥前の名産品一三七点を挙げ、簡単な説明を付したもの。第八に「磁器」を挙げる。作者不明、嘉永～安政頃の成立と推定。『肥前史談』第一三巻第五・六号（肥前史談会、一九三九）に所蔵者の千住武次郎が全文を読み下して紹介したことからその存在が広く知られ、今日でも近世佐賀の産業・工芸に関する基礎資料としてしばしば引かれる。千住は紹介にあたり磁器の項に「再註」を付して『日祖韓役の所俘云々始て漢津に陶し、後有田に移る。是を本山と号す』と、あるが之は誤りで、矢張李參平を開山とすることは、今日陶磁史家の定論であるから、一寸訂正して置く」と述べているが、これは同人が佐賀中学校長在任中の大正六年（一九一七）、「陶祖李參平之碑」の撰文を草したことと関係しているものと思われる「宇治、一〇一七・二三」。以下、佐賀県立図書館蔵の千住西亭文書複製本から原漢文を翻刻。
- 36 『日祖韓役所俘明人吳祥瑞渤海某等始陶於漢津。後移於有田是號本山。汎某者世製御物授陸常大掾。又開官窯於大河内山專職東獻諸品。又南河原酒井田氏工於型製。三所者為上品。其磁聖之所出名泉山。又有小城松谷窯品同三所而今絕。其他有志田・黒磯・白石諸山。出鬻者多津於伊萬里。故他邦總稱為伊萬里陶。』
- 『陶説』 説古四一 「清秘藏。論窯器、必曰柴汝官哥定。柴不可得矣」に拵るか。

- 香山社中土香山、此云介遇夜摩以造天平瓮八十枚平瓮、此云毗邏介并造嚴瓮而敬祭天神地祇嚴瓮、此云怡途背、亦為嚴呪詛。如此、則虜自平伏」嚴呪詛、此云怡途能伽辭離。天皇、祇承夢訓、依以將行・・・天皇甚悅、乃以此埴、造作八十平瓮・天手抉八十枚手抉、此云多衢餌離嚴瓮、而陟于丹生川上、用祭天神地祇」。
- 弟磯城が葉盤八枚に食物を盛つて八咫烏を饗応し神武天皇に恭順した逸話。『日本書紀』卷三時弟磯城懼然改容曰『臣聞天壓神至、旦夕畏懼。善乎鳥、汝鳴之若此者歟』。
- 即作葉盤八枚、盛食饗之。葉盤、此云毗羅耐」。
- 垂仁天皇の皇后である日葉酢媛命が亡くなつた際、殉死を禁止していたため野見宿禰が土部百人を出雲から呼び寄せ、人馬その他の形の埴輪を造ることを奏上。その功績により土師姓を賜つたことを指す。『日本書紀』卷六「野見宿禰進曰『夫君王陵墓、埋立生人、是不良也、豈得傳後葉乎。願今將議便事而奏之』則遣使者、喚上出雲國之土部老佰人、自領土部等、取埴以造作人・馬及種種物形獻于天皇曰『自今以後、以是土物更易生人樹於陵墓、為後葉之法則』。天皇、於是大喜之・・・仍号是土物謂埴輪、亦名立物也。・・・天皇、厚賞野見宿禰之功、亦賜鍛地、即任土部職、因改本姓謂土部臣。・・・所謂野見宿禰、是土部連等之始祖也」。
- 斎部（忌部）は祭祀や祭具制作を、土部（土師部）は土師器製造を担つた品部で、これらが備前と出雲に置かれたと述べている。
- 9 伏羲と神農のこと。
- 10 堯は陶及び唐に封ぜられ陶唐氏を称した。
- 11 『陶説』説古三三「史記。五帝本紀。舜陶河浜。河浜器、皆不苦窳。作什器於寿邱」。『史記』五帝本紀「舜耕歷山、漁雷沢、陶河浜、作什器於寿丘」。
- 12 『孟子』公孫丑上「孟子曰・・・大舜有大焉、善與人同。舍己從人、樂取於人以為善。自耕、稼、陶、漁以至為帝、無非取於人者。取諸人以為善、是與人為善者也・・・」。
- 13 『孟子』離婁章句下「孟子曰、人之所以異於禽獸者幾希。庶民去之、君子存之。舜明於庶物、察於人倫。由仁義行、非行仁義也」。
- 14 陶正は陶工の司役の官名。『陶説』説古二九「黃帝陶正、設官之始」。
- 15 陶正は陶工の司役の官名。『陶説』説古三五「考工記。搏埴之工、陶旅」に拠るか。考工記は『周礼』の一篇。
- 16 『陶説』説古三三「虞闔父、入周為陶正。陳敬仲、奔者為工正。亦或以上陶之裔故也」に拠るか。『春秋左氏伝』六〇子產獻陳捷于晉襄公二十五年「昔虞闔父為周陶正。以服事我先王」。陶正は陶工の司役。春秋時代の陳完は斉で百工を統率する工正の職に任せられた。
- 17 『礼記』郊特牲「器用陶匏、以象天地之性也」。陶匏は素焼きの器のこと。
- 18 『陶説』説古三九「邢瓷類銀、越瓷類玉」。越瓷は越州窯の瓷器、邢瓷は邢州窯の瓷器のこと。
- 19 『陶説』説古一〇「唐曰千峰翠色、柴周曰雨過天青」に拠るか。同書古窯考の各窯の項にも同様の説明あり。
- 20 『陶説』説古四五「格古要論。官窯器、宋修内司燒者・・・有鱗爪紋、紫口鐵足、好者与汝窯相類」。底本及び東博所蔵瑠璃釉皿では「琇」、大宅翻刻では「琇」。坦南が自註で説明しているように釉薬の意。
- 21 「輪薬」は「うわぐすり」すなわち釉薬のこと。
- 22 茶壺、茶心壺のこと。煎茶道具の一種で茶葉を入れる容器。
- 23 茶壺、茶心壺のこと。煎茶道具の一種で茶葉を入れる容器。
- 24 雲屯は煎茶に用いられる水指。

## 注

- 1 北村弥一郎は、贊の制作を命じたのは十一代佐賀藩主鍋島直大としているが、安政五年当時の藩主は真正であり、序文中の「公」も真正を指す。
- 2 「泥皇」は宇比地邇神（渥土煮尊）、「沙皇」は須比智邇神（沙土煮尊）のこと。『日本書紀』卷一「次有神、渥土煮尊。渥土、此云于毗尼。沙土煮尊。沙土、此云須毗尼。亦曰渥土根尊・沙土根尊」。
- 3 大国主神と少名毘古那神のこと。
- 4 底本では「扶」だが、「抉」の誤写か。手抉は土器を手で作ること、あるいは土器の一種。

神武天皇が大和平定の際、夢告に従つて天香久山の赤埴、白埴で土器を作り、天神地祇を祀つて戦に勝利した逸話。『日本書紀』卷三「夢有天神訓之曰『宜取天

久、古猶難還京世称南。 摂算田窯、得其一斑。淡路綠紫、後出先鞭。研智得巧、物產罔殫。其余瓷器、品類百千。資天草石、摹擬以衒。斯皆讓我、独步区寰。伊港舶載、海運牲々肥前諸陶、自伊萬里燒。称伊萬里燒。猶磁器稱南京。 伝播孔広、欧羅米堅。尚我文物、皇風永延。矧我邦内、資奉晨昏。養老慈幼、治斯成歡。于飲于食、洪恩不謾。贊揚陶事、薄斯研鑽。盈缶之孚、視諸蕪篇。

### （二）詠磁器

#### 詠磁器

与同社分題肥前名物百六十七種之一<sup>35</sup>。日祖韓役所撫署渤海某等与明吳祥瑞、採小城白坂之瓷聖創陶於松谷。後移于杵島郡有田、開瓷聖擴於泉山。又別開官窯於大河内山、專職東獻諸品。又有田辻某世製內御物。南河原坂井田氏工於範製印器。三處者為上品而有田号本山。其他（有）廣瀬、黒曇、藤津郡吉田志田、三根郡白石山諸窯。其出鬻者多津於松浦郡伊萬里。故他邦總稱為伊萬里燒。

松谷初呈祥瑞才。泉山瓷聖寔是靈哉。精工本得龍缸秘明之禁窯。名龍缸。 古制復同柴器開青磁之制自晋唐有之、周末最盛有矣汝哥也。至元而我大河内窯却復之後清亦復而不如我有古製也。<sup>36</sup> 美見錦紋繩繡耀有田赤絵巻皆美錦手金襷。 美見錦紋繩繡耀手明人所謂官絹繡花是也。

青滴白瓷青花明之官窯之稱燒成。上我做之稱燒成。 膜殘茅蔑猶瓊玉茅蔑謂器者。指傷有瑕者。 關國都捐瓦缶來。

維時 文久四年歲在甲子春三月中澣偶 錄旧製 坦南武富定保



一、各底本については解題を参照のこと。

一、漢字表記は原則として常用漢字を用いたが、一般に用いられることの多い異体字・別体字についてはこれを採用した箇所がある。

一、句読点については句のまとまりや読みやすさを考慮して底本から適宜変更、加除した。

一、闕字は省略した。

(二) 陶器贊並引

日域之工治為盛而陶亞之。然治多備於非常、陶則日用資焉。但自古貢獻、雖稱瓷器、其實有泥器砂器而已。我日峰公始創窯、邦產於是加盛、足以輸出裨國。公克繼述之、濬慮於陶事。維安政五年戊午十一月命作文贊之<sup>1</sup>。臣定保奉承盛意、素請求陶要。乃贊曰。天地方闢、混沌氤氳。一氣斡運、乃転洪鈞。磅礴凝質、生物生人。誰其象之、創此陶甄。捏埴埴、廻旋輪囷。閟彭弇哆、唯命之遵。邈矣我邦、上古聖神。泥皇沙皇<sup>2</sup>、德象厚坤。有道有器、莫知厥源。大已少彥<sup>3</sup>、開物頻繁。窟宅陶穴、蓋已造端。乃有掘据掘之掘據、是繼污樽。代杯飲者、瓦杯存淳俗呼土蓋瓦筍。又汎稱土器。。又有扁壺、勾玉納焉。穴居攸用、匪措維懸。及神武皇、降臨中躰。有神知彥、採土香山。心祝手抉<sup>4</sup>、良器乃陳。平甕嚴甕、以祝以禋<sup>5</sup>。定丕々基、開濟屯蹇。時弟磯城、思奉天孫。八器饗使、將缶將盤<sup>6</sup>。至垂仁朝、禁殉寔恩。野見宿禰、巧思開便。塑以就陶、号曰埴輪。賜土師姓、永言弘仁<sup>7</sup>。由茲厥後、為陶寔蕃。葉盤高垸、羞鱸薦膳。高坯窪坯、謂豐与盆。庶方並作、孰後孰先。斎部土部、在備与雲<sup>8</sup>。伊勢瓶子、普用祀賓。我土師鄉、亦誰昔然有神墳郡。。何俾行基、令名敢專世稱辟古陶。。咨彼西疆、利用厚生。維羲暨農<sup>9</sup>、何肇何訟。堯号陶唐<sup>10</sup>、其必有因。及大舜出、効智河浜<sup>11</sup>。取人為善<sup>12</sup>、明物察倫<sup>13</sup>。器不苦窳、規型永存。乃至裔胄、陶正世宦<sup>14</sup>。歷夏殷周、厥職不渝。考工謹記<sup>15</sup>、陳勝承勤<sup>16</sup>。礼用陶匏<sup>17</sup>、重於璠璵。矧舜之遺、土脈罔堙。定刑革治、白堊猶墳。甌越入漢、窯器一新。越瓷比玉、邢瓷比銀又作蓋同磁。。唐尚翠色、如攬峰繚古越翠青。。周好天青、千春新鮮<sup>19</sup>。

[https://static.saga-ebooks.jp/actibook\\_data/\\_p\\_saga.jimeijiten\\_202303300000/HTML5/pc.html#/page/1578](https://static.saga-ebooks.jp/actibook_data/_p_saga.jimeijiten_202303300000/HTML5/pc.html#/page/1578) ((1011四年1月16日閲覧)

- ・石割松太郎、一九二四、『祥瑞の研究』、宝雲舎
- ・宇治章、二〇一七、『肥前名物題註』にみる佐賀の名物・特産品について、佐賀県立博物館・美術館編『調査研究書』第四集
- ・大宅経三、一九二一、『肥前陶窯之新研究 上巻』、田中平安堂
- ・尾崎洵盛、一九八一、『陶説注解』、雄山閣出版
- ・北村弥一郎、一九〇一、「雑報 陶器贊并引」、大日本窯業協会編『大日本窯業協会雑誌』第一〇巻第一一八号
- ・久米邦武、一九三四、『久米博士九十年回顧録』下巻、早稲田大学出版部
- ・小宮木代良、二〇〇九、『陶祖』言説の歴史的前提、北島万次他編著『日朝交流と相克の歴史』、校倉書房
- ・小宮木代良、二〇〇九、『陶祖』言説の成立と展開、『九州史学』、九州史学研究会
- ・佐賀県立九州陶磁文化館編、一九八三、『近代の九州陶磁』
- ・佐賀県立美術館編、一〇〇一、「佐賀鍋島藩の美術」
- ・鹽田力藏、一九三五、「日本磁器の創業」、東洋美術研究会編『東洋美術』第二一号
- ・鈴田由紀夫、二〇二一、「香蘭社 歴史と作品変遷」、創樹社美術出版
- ・千住生（武次郎）、一九三九、「肥前名物題註」、肥前史談会編『肥前史談』第一二巻第五・六号
- ・徳永貞紹、二〇二一、「肥前小城松香渓焼の基礎的研究」、佐賀県立九州陶磁文化館編『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要』第八号
- ・中島吉郎・太田保一郎、一九四一、「佐賀先哲叢話」、佐賀郷友社
- ・中島浩氣、一九三六（一九八五）、「肥前陶磁史考」、肥前陶磁史刊行会（青潮社）
- ・細川潤次郎、一九二三、「十洲詩鈔」卷二二・一四
- ・諸橋轍次、一九五八（一九七六）、「大漢和辞典」、大修館書店
- ・矢部良明、一〇〇一、矢部良明他編『角川日本陶磁大辞典』、角川書店
- （史料）
- ・金森得水『本朝陶器攷証』安政四年（一八五七）
- ・千住西亭文書一四（複製本）佐賀県立図書館蔵 請求番号：複千〇一四

など、今日では容れられないような説も含んでいるが、むしろそうした誤解や俗説も含めて内容を吟味し、佐賀藩の陶磁関係史料や同時代の陶書などの比較を通じて評価することが不可欠である。これについては本稿では及ばなかつたので他日稿を改めたい。

なお、本稿執筆にあたり、当館の徳永貞紹シニア・アドバイザリー・フェローほか学芸課職員から助言や示唆を得た。

## 注

1 坦南自筆本を所蔵していた佐野安麿は旧制第四高等学校助教授や小城中学校長などを歴任した教育者である。佐野家は小城藩医であるが、白山武富家と姻戚関係（坦南の墓碑によると母は佐野氏）にあり、父文仲が坦南と幼馴染みであった関係で自筆本が安麿の手元に伝わっていたという「大宅、一九二一・二八七」。文仲は佐賀藩医福地道林の娘を妻に迎えたが、福地の屋敷は佐賀城下八幡小路の坦南私塾のすぐ隣であった「中野、一九二一・四八四」。このほかの伝本として坦南手元控え本、納富介次郎本、大宅写本を写した伊丹彦次郎本や中野五郎本などがあつた「大宅、一九二一・二八八」。

2 いずれも底部にほぼ同文の銘が記され、東博藏品には「此篇、博覧会事務官納富君所珍藏詳尽陶之要、友人深川兄請予書曰、是米国博覧会出品之一也。予不敢辞課児童之余。草々。把毫一揮」とある。これにより、この皿が明治九年（一八七六）の「フィラデルフィア万国博覧会」に出品予定であつたこと、博覧会事務局の事務官であつた納富介次郎が「陶器贊並引」の恐らく写本を所蔵しており、当時白川小学校長であつた江越は香蘭社社長深川栄左衛門の依頼を受けて納富本をもとに揮毫したことなどが判明する。ただし、フィラデルフィア万博出品目録に該当するものは確認できず、実際に出品されたかどうかは不明である。

3 阪谷朗蘆宛武富坦南書翰（年不明八月二十四日付）、国会図書館憲政資料室蔵「阪谷朗蘆関係文書」書翰の部一〇〇

『十洲詩鈔』卷二三「肥前陶師某乞詩、乃書此詩与之 西肥到處簇窯煙。精器一年多一年。孰繼坦南老居士。贊揚陶事作新篇。」

肥前人武富坦南作陶器贊文。

5 資料名・武富坦南磁器七律詩書、収藏番号・〇三三二七五、一九九五年受入、竹田碰智夫氏寄贈、紙本墨書・掛幅装、寸法・一〇七・〇×三三・二センチメートル。伝來の経緯は不明だが、箱の蓋裏書には「昭和十一年歳次丙子春日 精斎簽書」とある。「精斎」なる人物について、断定はできないが、佐賀出身の医師持永精斎である可能性を指摘したい。持永が佐世保市で医院を開業していた時期に寄贈者竹田碰智夫氏の父である恒夫氏も市内で医院を開業しており、佐賀藩時代の事情を知る持永に箱書きを依頼したことが推察される。

## 参考文献

- ・生馬寛信、一九八三、「有田の陶磁業教育と江越礼太」、九州教育学会編『九州教育学会研究紀要』第一一卷
- ・伊香賀隆、二〇二三、「武富坦南」、佐賀県立佐賀城本丸歴史館編『佐賀県人名辞典』

子が描かれる。市ノ瀬山、広瀬山、黒牟田山、外尾山<sup>ほかお</sup>、内野山、吉田山、志田山などに加え、白石<sup>しらいし</sup>や三川内にも言及している。末尾では、瀬戸や龜山、九谷、三田など他産地の磁器と比較して肥前磁器の優越を説き、遠く欧米にまで流通し、国家に貢献していることが謳われる。

このうち中国陶磁に関する部分は、乾隆三九年（一七七四）に朱琰<sup>しゅえん</sup>が著した『陶説』を参照したことが明らかである。『陶説』は文化三年（一八〇六）葛西因是が、文政一〇年（一八二七）青木木米が翻刻し、それぞれ市河米庵、賴山陽が序文を寄せている。青木版は木米没後の天保六年（一八三五）五〇部程度が版行されたのみで長らく稀観本であった「鹽田、一九四四」。中国で刊行された諸本も日本に舶來した部数はわずかであつたので、坦南は葛西版に拠つた可能性が考えられる。朝鮮陶磁や日本陶磁に関する部分がどの文献を参考にして書かれているかは今後考究すべき点である。

なお、坦南と親交のあつた漢学者の間で「陶器贊並引」の存在は早くから知られていたようである。明治五年（一八七二）～七年（一八七四）頃、坦南は詩会で交わっていた阪谷朗廬に自らが所蔵する「陶器贊並引」を貸し出しており、そのきなか博覽会事務局関係者から借用希望があつたため返却してくれるよう依頼している<sup>3</sup>。また、北村翻刻公刊後の例だが、明治四二年（一九一〇）頃細川潤次郎は肥前地方の陶工に請われて作った詩において、誰かが坦南の遺業を継いで新しい陶器贊を作ることを期待している<sup>4</sup>「細川、一九一三・一」。

「詠磁器」は坦南自筆の書幅が今日まで伝わり、現在は佐賀県立九州陶磁文化館（以下、九陶）が所蔵している（写真四～六参照）<sup>5</sup>。異本が存在する可能性もあるが、確認されている限りでは九陶本が唯一のテキストである。従来その存在を含めてほとんど注目されてこなかつたが、近年、小城の松香渓焼に関する江戸後期の認識を示すものとして「陶器贊並引」とともに取り上げられた「徳永、一〇一三三」。

九陶本は「詠磁器」という詩題の下に『肥前名物題注』第八「磁器」を一部修正した文章が序文的に記されている。こちらも詩句の間には坦南自註が挿入され、字句の補足説明がなされている。七言律詩形式の詩は、肥前磁器が中国陶磁を手本に青磁・金襴手・染付など各種類において展開してきたこと及びその美しさを謳いあげる。吳祥瑞・渤海某による小城松ヶ谷での磁器の試焼に始まり、泉山での陶石発見以後、景德鎮窯の技術水準に迫り、あるいは周・宋の名窯に匹敵する青磁を復活させ、美しい色絵や染付を作り出してきたという。「陶器贊並引」を縮約したかのような内容だが、表現や語彙に多少の相違がある。落款部分には文久四年（一八六四）三月の「錄旧製（旧製を錄す）」とあるので、詩が作られた時期はこれ以前であることが分かる。

二つの詩は幕末段階での肥前陶磁史の認識や言説を示す一例としての意義を有する。吳祥瑞・渤海某らが松ヶ谷で磁器の試焼を行つたとしている点

東京で死去した。墓は東京都港区の青山墓地と佐賀市呉服元町の称念寺にある。著書に『密菴詩文集』、『密菴文類略抄』、『嘉田中村先生行状』、『通訳辨体』など「伊香賀、二〇二三・中島・太田、一九四一」。

二篇の詩の翻刻に先立ち、書誌情報と梗概を述べておきたい。

「陶器贊並引」は大正期まで坦南自筆の原本が伝わっていたことが確認できるが、現在その存否は不明である。明治三五年（一九〇二）北村弥一郎が『大日本窯業協会雑誌』第一〇巻第一一八号に、大正十年（一九二一）大宅経三が『肥前陶窯之新研究』上巻に全文を翻刻した。兩人とも佐野安麿が所蔵していた坦南自筆本を借覧して書き写しているが、くずし字の解説や句の切り方に多少相違があり、それぞれに明らかに誤写と思われる字が複数含まれる<sup>1</sup>。さらに、書写あるいは印刷の過程で、詩句の間に挿入されていた坦南自註が本文に紛れてしまい、詩の本来の形が崩れてしまっている。

また、明治九年（一八七六）江越礼太が香蘭社製の瑠璃釉変形皿に贊のみを金泥で揮毫し焼き付けたものが二点伝存しており、香蘭社と東京国立博物館（以下、東博）に所蔵されている「鉢田、一一〇二二一・三四」<sup>2</sup>。香蘭社所蔵品は金彩が剥落しており判読が難しいが、東博所蔵のものは比較的鮮明であり十分に判読できる（写真一～三参照）。複数箇所の字句の欠落ないし意図的な省略がある一方、北村や大宅の翻刻で不明とされた字が書き写されているなど参考すべき点も多い。

本稿では北村翻刻を底本とし、大宅翻刻と東博所蔵品に拠って校合した。詩句と註は分け、原文の構成を復元した。

「陶器贊並引」は序文と四言詩の贊からなる。序文では、藩祖鍋島直茂以来の陶磁器生産に直正も大いに意を用いており、今般陶磁器に関する贊を作るようとの命が下った旨が述べられている。贊は内容から前段と後段に分けることができる。前段は日本神代から中国古代（明、朝鮮）に至る陶磁史や日本に請來され珍重されてきた陶磁器について述べる。記紀の国土創造に始まり、天神地祇による開物、神武東征時の平甕（ひらか）・嚴甕（いらか）制作、野見宿禰の埴輪発明、堯・舜ら聖帝たちの陶業、漢代以降の青磁・赤絵・天目・紫泥朱泥・青花（染付）・金襷手など諸種の中国陶磁、高麗茶碗などの朝鮮陶磁、宋胡録など東南アジアの諸陶、仏郎嵌（いはき）とい明清代の七宝にまで触れている。後段では日本の諸陶が取り上げられ、北部九州周辺では唐津、萩、高取、矢上、黒牟田、武雄、鹿島、藤ノ川内、尾崎などの窯業地の名が製品の特徴とともに列挙される。なかでも有田焼を中心とする肥前磁器の叙述は詳細である。文禄・慶長の役で鍋島直茂が朝鮮半島から陶工を連れ帰り、あるいは明人の吳祥瑞と渤海某が小城の松ヶ谷で磁器の試焼をしたことにより、泉山で陶石が発見され、大川内山の将軍家献上品、辻家の禁裏御用品、赤絵町の色絵、南川原山（なんがわらやま）の型物、応法山（おうぼうやま）の瓶子などが発展してきた様

## 【資料紹介】

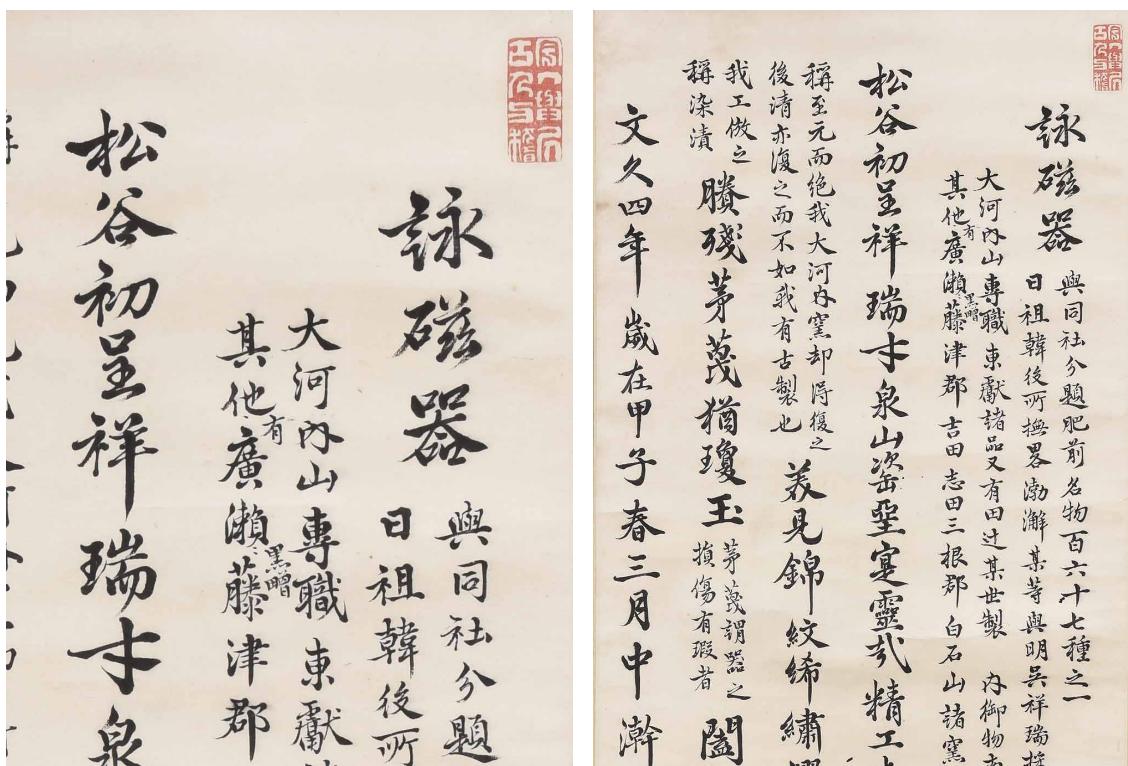
## 武富圯南「陶器贊並引」及び「詠磁器」

芳野 貴典

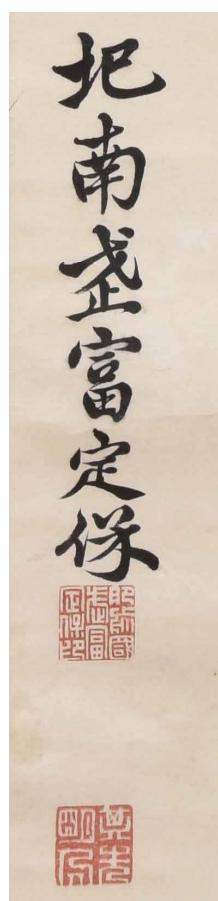
## 解題

幕末佐賀藩の儒者たけひみいなん武富圯南（一八〇八～一八七五）には肥前陶磁に関する一篇の詩がある。安政五年（一八五八）十一月に十代佐賀藩主鍋島直正の命を受けて作った「陶器贊並引」と、詳しい制作時期は不明ながら文久四年（一八六四）三月以前作の「詠磁器」である。いずれも中国の経書や日本の記紀に見られる陶業伝承及び日本で珍重されてきた中国・朝鮮半島の陶磁器などに触れつつ肥前陶磁の歴史や特質を詠んだものである。圯南は陶磁器の専門家でも愛好家でもないが、朱琰『陶說』をはじめとする国内外の文献や藩内の記録、伝承に幅広く取材して詩作を行っている。なかには誤つた理解や今日の研究では俗説として排除されるものも含まれているので多分に割り引いて読む必要はあるが、幕末の佐賀藩において一学者が肥前陶磁史をどのように理解し、その叙述を試みたかを示す手がかりである。とりわけ「陶器贊並引」の制作は単なる文人の道楽ではなく、藩が殖産興業のため陶磁器生産に力を入れていた時期に公命によつてなされたものだ。直正がそれをどのように活用するつもりであつたかは知る由もないが、政策を進めていくなかで必要とされた物語＝歴史であつたといえよう。

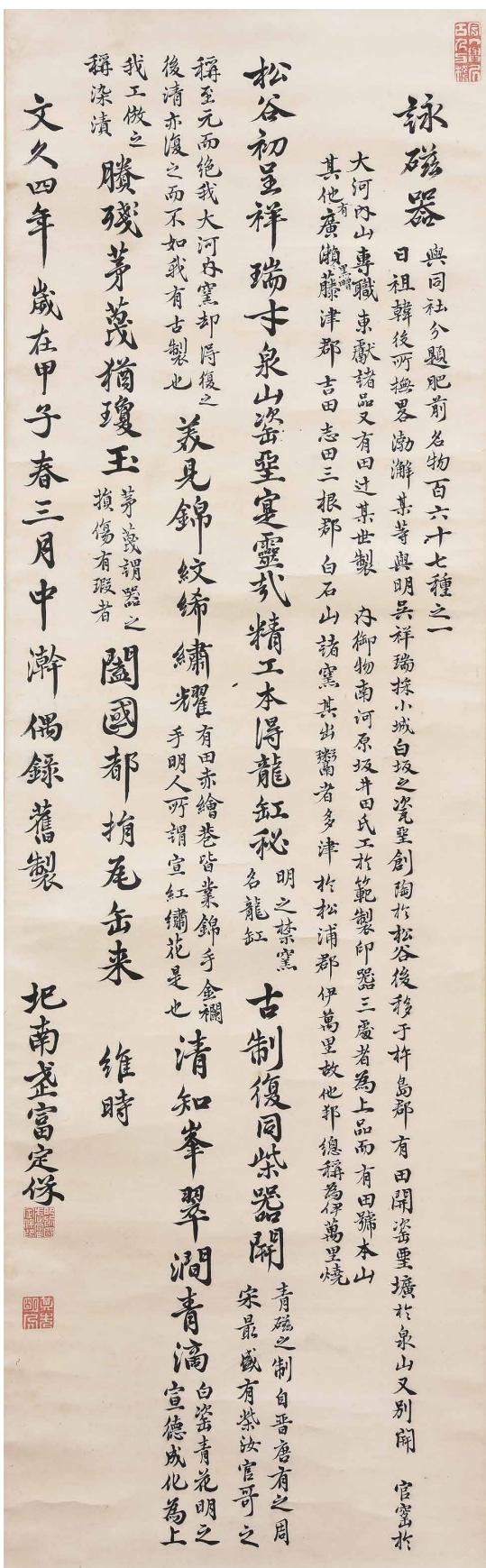
作者の武富圯南は文化五年（一八〇八）佐賀城下白山町の豪商武富家に生まれた。名は定保、通称は文之助、字は元謨、号は圯南・密庵・碧梧樓・洛齋・梧栖・右泙・款段子・天燭舎など。武富家は中世末に来日、帰化した明人「十三官道順」を始祖とし、のち白山・勢屯・大財の三家に分かれ、呉服商や幕吏向けの旅館、薬店「萬金丹」を営んだ。幼くして学問を好んだ圯南は、一五歳で実家の援助を受けて学問文芸の道に入った。江戸では古賀洞庵（幕府御儒者、佐賀藩出身で昌平齋教授となつた古賀精里の子）について学んでいる。洞庵が朱子学批判の立場から「父は朱子の孝子だったが、自分はその忠臣となつて誤りは諫め止めよう」と述べたのに対し、圯南は「忠臣であることは易しく孝子になるのは難しい。自分は孝子とならん」として朱子学を堅持した逸話は知られるところである。帰藩後は弘道館で教鞭を執つた一方、城下八幡小路で私塾「天燭舎」を開き、大隈重信や久米邦武らに書、漢学を講じた。明治期に有田焼の絵付けを手掛けた画家高柳快堂も圯南から漢文と画法を学んでいる。直正は「もし私に文之助の学問の十分の一でもあれば、天下で自在に活躍できるだろう」と評したとされる。明治維新後は東京に移り住み、旧雨社などの漢詩結社で活動。明治八年（一八七五）、



【写真5】同 詩題部分



【写真6】同 落款部分



【写真4】武富圯南「詠磁器」  
 佐賀県立九州陶磁文化館所蔵  
 竹田礎智夫氏寄贈



【写真1】瑠璃釉金彩詩句文変形皿 香蘭社製 東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives



【写真2】同 落款部分

【写真3】同 底裏銘